

——— モーセは伝え、民は行（おこな）った ———

（21～28 節）（第一コリント 4:1、2 節）パウロは言いました。「人は私たちをキリストのしもべ、神の奥義の管理者と考えるべきです。その場合、管理者に要求されることは、忠実だと認められることです。」

モーセは今、神様の御旨を忠実に、イスラエルの人々に伝えました。（21～27 節、読む）（28 節）「こうしてイスラエルの子らは行って、それを行った。主がモーセとアロンに命じられたとおりに行った。」

このみ言葉通りにイスラエルの人々は皆一つになって、モーセの語られた言葉のままに神様に従い、行いました。ここに祝福があったのです。

——— いよいよの審きが始まりました ———

（29～34 節） やがて（29、30 節）「真夜中になったとき、主はエジプトの地のすべての長子を、王座に着いているファラオの長子から、地下牢にいる捕虜の長子に至るまで、また家畜の初子までもみな打たれた。その夜、ファラオは彼の全家臣、またエジプト人すべてとともに起き上がった。そして、エジプトには激しく泣き叫ぶ声が起こった。それは死者のいない家がなかったからである。」

ここに至って、ついにファラオはたまりかねて、以前「二度と顔を見ない」と言っていたモーセとアロンを呼び寄せました。そして言いました。

（31、32 節）「おまえたちもイスラエル人も立って、私の民の中から出て行け。・・・」

（33、34 節）エジプト人も、この異常な出来事を目撃して叫びました。「われわれはみな死んでしまう」こうして、ついにエジプトについて神様が語られたことが、ファラオと、その民エジプトの人々によって受け入れられたのでした。

——— 「すみません」では済まされない ———

これはある伝説です。この夜、イスラエルの家族に属する一人の少年がいました。彼は病気で寝ていましたが、夜中近くになってから父に尋ねました。「お父さん、子羊の血は大丈夫ですか。鴨居に塗ってありますか？」彼はその家の長男でした。父は答えます。「確かにそのようにすると、召使に命じておいたから大丈夫だ。心配しないで静かに寝ていなさい。」しかし、彼は言いました。「でも私は何か気がかりなのです。本当に、塗ってあるかどうかを確かめたいのです。お父さん、私を連れて行ってください。」

切なる願いによって、父は彼を連れて行きますと、何と命令を受けていたはずの召使が、その事をすっかり忘れてしまっていて、血が鴨居に塗られてはいませんでした。父はあわて、塗ったので、少年はあやうく命拾いをしたのでした。

私たちを罪の滅びから救うのはキリストの血です。ですから、私たちはもう一度、自分がキリストの血の下にいるか否かを、しっかりと確かめなくてはなりません。 自分自身の救いに関しては、他人まかせであってはならないのです。「すみません」では済まされないのです。

——— 主の守りと御配慮 ———

(35、36 節) さて、イスラエルの人々は、エジプトを出発する時に、エジプト人に向かって銀の飾り、金の飾り、更に衣服を求めました。すると (36 節)「主はエジプトがこの民に好意を持つようにされたので、エジプト人は彼らの求めを聞き入れた。こうして彼らはエジプトからはぎ取った」のでした。

このようにして神様は、エジプトを通して、イスラエルの民を祝福しました。そして、金銀、財宝をおびたしく彼らに与えられました。それにしてもここに、これから旅に出ようとしている、イスラエルの人々に対して心憎いまでの配慮をなさっておられる神様の愛を見るのです。

それにしても、この金銀はいわゆる賠償金と言う様には、考えられないでしょうか？

ソロモンのことばの中に、箴言 13:22 に次の様な言葉があります。

「善良な人は子孫に遺産を残す。罪人の財産は正しい人のために蓄えられている。」

神様はある時、不義の宝を義しき者に渡して、この宝を聖め生かして豊かに用いられる時があります。実際に 300 年間も、イスラエル人はエジプトで奴隷として働き続けて来ました。ですから、これらは、その長い間の苦役の代償でもありました。そして、これらの金銀は、やがて荒野においての、神様の幕屋を建設するための資金ともなりました。

(25:1、2 節)「・・・イスラエルの子らに告げよ。あなたがたは、すべて、進んで献げる心のある人から、わたしへの奉納物を受け取らなければならない。・・・」(35:21～25 節)

——— 主の守りと祝福と摂理 ———

さて、イスラエル人の、エジプトから脱出した人々は (37 節)「イスラエルの子らはラメセスからスコテに向かって旅立った。女、子どもを除いて、徒歩の壮年男子は約六十万人であった。・・・」と書かれています。ですからこれに女性、子どもも加えれば、少なくとも 200 万人にはなると思われます。イスラエルの人々がエジプトに住んでいた期間は 430 年でした。それにしてもこの期間に、こんなに多くの国民に成長したということは、実に、神様の守りと祝福、摂理があったからでした。

——— すべての人々を救われる神様 ———

(38 節、読む) しかし、この群れの中には「・・入り混じってきた多くの異国人と、羊や牛などおびたしい数の家畜・・・」が含まれていました。実は、この後の旅の中で、この「入り混じって来た多くの異国人」が、いろいろな問題を引き起こす事になるのです。

(民数記 11:4 節)「彼らのうちに混じって来ていた者たちは激しい欲望にかられ、イスラエルの子らは再び大声で泣いて、言った『ああ、肉が食べたい。・・・』」

確かに、どの時代、どの環境の中にも問題は起こります。主に素直に従おうとする者もあれば、反抗する者もいるでしょう。これらの人々が対立し、争うこともあるでしょう。でもそれらは、当然起こる事と言っても良いでしょう。

問題を起こすからと言って、その人が必ずしも悪い人なのではありません。懸命に生きているならば、全てを前向きに考えようとするならば、常に前進しようとしているならば必ず起こる事です。むしろ、問題がないことが問題なのかも知れません。教会とて同じです。

出エジプトの時もそうでした。全体が一致しているように見えても、この集団にはすでに問題は潜んでおりました。もちろん、神様はすべてを御存じでした。それをすべて承知で、神様はその問題を起こすかも知れない人々を、イスラエルの群れの中に入れる事を許されたのでした。神様のお心は広いですね。

——— 入り混じっていた異国人 ———

(43～49 節) 多くの入り混じって来た異国人のことですが、実は出エジプトの出来事は、イスラエル人のためだけではなく、すべての、世界中の人々の救いにも関わっています。ここではイスラエル人も異邦人も、すべての人々は、主の示されたおことばに従うならば、審きを免れる、と言う事が教えられています。

確かに、私たち人間はアダムの罪ゆえに、そして自分自身の罪ゆえに、審かれます。しかし、神のみ子イエス・キリスト様が私たちの罪のために十字架上で血を流し、身代わりとなって死んで下さったのです。ですからこのイエス様を信ずる者は誰でも、異邦人も皆、死と審きから救われることが出来ます。繰り返しますが、ユダヤ人も異邦人もありません。人はみな、神様が備えて下さった同じ方法によって、そうイエス様の血によって、救われるのです。(49 節)「このおしえは、この国に生まれた者にも、あなたがたの間に寄留している者にも同じである。」

(39～42 節、読む) そして、この夜、神様は人類を救う業をなさいます。完璧になさいます。ですから主は、サタンに邪魔されないように**寝ずの番をされた**のでした。

——— すべて、救いの業は完璧に行われた ———

(51 節)「まさにこの日に、主はイスラエルの子らを、軍団ごとにエジプトの地から導き出された。」

神様はイスラエルの人々を、エジプトから導き出す時、これを一個の軍隊として扱いました。軍隊、集団であるならば当然、指導する者、指導される者がいるはずです。

イスラエルはどこまでも、主の集団でした。すなわち、神様のご支配の下に、そのみ旨に従って、闘う集団、行動する集団でした。まさに、一系も乱れずして、この業は行われました。ウェスレー牧師は言いました。「ただ、み光に導かれ、ただ力に強められて・・・」と。

(28 節)「こうしてイスラエルの子らは行って、それを行った。主がモーセとアロンに命じられたとおりに行った。」 同じ言葉が繰り返されています。

(50 節)「イスラエルの子らはみな、その様に行った。主がモーセとアロンに命じられたとおりに行った。」

——— 子孫にも伝えよ ———

主は、今始まったばかりの新しい時代の中にも、イスラエルにこれからも代々限りなく、過越しの祝いを守り、その子孫にその意味を教える様にと、命じられました。

ですから今の時代、私たちも毎月、聖餐式を守って、イエス・キリストの贖い（身代わりの死）を、その救いの意味を、しっかりと後の子供たちに、多くの人々に伝えて行かなければなりません

これが教会の使命なのですね。